

大 我 井 經 塚

資 料 集 第 二 号

妻 沼 町 教 育 委 員 会

文 化 財 調 查 研 究 会

經塚之碑

經塚之碑 題額 妻沼町長 増田一郎書
 この地大我井は平安時代より鬱蒼とした森で式内社
 白髪神社が鎮座されたと伝えられ鎌倉時代には紅紫
 の名所として詩歌に詠まれた近くには原指定文化財
 板石塔婆の旧跡もあり往古より付近一帯は聖域とさ
 れてきた明治四十年小学校令の改正により同四十三
 年由緒あるこの地域を妻沼小学校の敷地とし爾來今
 日に至る昭和三十二年九月校庭の拡張整地中礎石
 基の経塚群を発見し出土した銅製経筒に久安年銘
 の墨書が判読されたが中の経巻は土塊状に化してい
 た和鏡丸面は藤原様式が窺われ金銅花瓶は平安後期
 の特色を示し其の他刀子小埴櫛槍扇白磁片合子等が
 ありこれら一連の埋蔵品は八百数十年前の供養具と
 して貴重な資料と認められ同三十四年六月以降国重
 要文化財工芸品として東京国立博物館の保管すると
 ころとなり茲に同好の士相計り大我井経塚史跡とし
 てこの碑を建て後昆に伝える
 昭和五十七年三月
 妻沼町教育委員会 建之
 文化財調査研究会
 田島一郎撰
 大山雄三書



← 經塚遺跡第一号跡出土經筒
久安年銘の墨書認められる



→ 經塚遺跡第三号跡出土經筒

和 鏡

↓ 經塚遺跡第二号跡出土
山吹双鳥鏡



↓ 經塚遺跡第三号跡出土
草花双鳥鏡



第 次 式 幕 除 塚 經

日 時 昭和 5 7 年 5 月 9 日 午前 9 時より
場 所 妻沼小学校校庭

開 式 の 挨 拶
読 經
除 幕
読 經
挨 拶
来 賓 祝 辞
閉 式 の 挨 拶
一 般 焼 香

以 上

経塚の碑に寄せて

妻沼町長 増田 一郎

町文化財に深い関心を抱いている同好の皆さんが相寄り、多年に亘り郷土史の分野を調査研究されていることはご同慶に堪えません。

当町の黎明期とも云うべき平安時代に、現在の妻沼小学校附近は大我井の森として幽すいな聖地であり又紅葉の名所として世に知られました。

特に利根自然堤防上にあつて小高い丘を形成し膝下に刀江の清流の瀨音を聴き、仰げば上毛三山を観て、遙か東の彼方には、淡く筑波の峰を望んで実に北武の絶景の地でありました。先人がこの地を聖域として経塚を築き埋蔵した其の後、星霜八百有余年を経て忘却の彼方に歳月は流れて今日に至りました。この遺跡が偶然にも、昭和32年9月 四基復合して発見され、特に経筒には久安年銘が墨書されていることや、供養具一式が、平安時代の美術工芸の特色を顕わしていることから、経塚の実態と出土遺宝の概要が解明され、郷土史のみならず国の文化財的貴重な資料であると認められ、日本工芸史に又宗教史にも寄与するところ極めて大なるものがあることは衆知の通りであります。

依つてこの度由緒ある地に大我井経塚の碑を建て、併せ資料集を復刻し、千万年に残そうと企画して、私に題額を囑されたので、心よく需に応じて拙筆をかえり見ず揮毫した次第であります。

これを機に町の古代から中世にかけて、郷土の先人の輝やかなしい事蹟を更に深く探索し郷土史の解明と文化の発展の資に裨益して頂ければ幸甚に存じます。

茲に経塚之碑除幕式に当り郷土史に造詣深い皆様と共に欣快に堪えず心からの祝意を述べて挨拶と致します。

昭和57年3月

経塚之碑建立を祝して

妻沼町教育長 増 田 稔

埋蔵文化財は国の宝として保存すべく全国各地で発掘調査が行なわれております。当町においてもここ数年発掘調査を続けており、数多くの遺物が発見されております。中でも弥生時代と思われる勾玉や縄文時代の土器類など貴重な工芸品が出土され、中央公民館に展示保管されております。

町で発掘が行たわれなかった昭和32年9月16日、妻沼小学校校庭拡張整地中、経塚を発見し、遺跡から全国でも珍しい平安時代の銅鑄製経筒、和鏡などが出土され、現在国の重要文化財として、東京国立博物館に保管されております。

国の重要文化財とはいえ、当町から出土されたものであり、熱心な丹呉邦晴先生の発意により、移還をと県に働きかけたものの、今の法律では如何ともしがたく、せめて記念碑でもと、文化財調査研究会の役員の方々を中心となり建立の運動をすすめました。幸いご理解ある増田町長さんを始め、教育委員、町議会議員、文化財調査研究会、更に特別奉仕者、こうした多くの方々の篤志と御厚情により、妻沼小学校校庭出土跡へ、大我井経塚記念の碑が建立される運びとなりました。

今ここにその除幕式が盛大裡にとり行なわれましたことは、これ一重に関係各位の賜物と深く感謝を申し上げる次第であります。

敏喜院前にある成田大夫式部大輔助高の青石塔婆（供養塔）、高島の岩松家に移されたという伊丹伯耆守重泰（1389卒）の五輪塔など妻沼小学校校庭にあったと云われ、又久安年間（1145～1150）は健在であった斎藤別当実盛公の館跡、大河内孫十郎（1599卒）金兵衛親子の陣屋跡とも云われ、正に歴史の地とも云えましょう。

当時、発掘に関係された武藤長三郎、荻野六三郎両先生を始め、国・県の先生方やご苦勞をおかけしたの方々に対しあらためて深甚なる感謝の意を表するものであります。今後、この記念碑が文化財資料として多くの人々のお役に立てば誠に幸甚です。尚、記念碑建立に際し特にご指導ご尽力頂きました高橋茂助役さん、妻沼町文化財調査研究会長田島一郎さん、同専門調査委員大山雄三さん、妻沼町文化財保護審議会長丹呉邦晴さん、前妻沼小学校長内田宗治先生に厚くお礼を申し上げます。皆様本当に有難うございました。これからも出土されると思われる埋蔵文化財を大切に頂き町の発展にお力添え下さるようお願い申し上げお礼のあいさつといたします。

昭和57年3月

宿 願 を 果 し て

文化財保護審議会委員長 丹 呉 邦 晴

妻沼町「大我井経塚」は、昭和32年9月妻沼小学校校庭整地作業中偶然発見されたものである。当時私は同校に在職中だったため、県専門調査委員の小沢先生と共に発掘に従事した。出土した経筒の墨書から久安の文字が判読できたので、妻沼町においては全く珍しい古代の貴重な仏教遺跡であると思った。

爾来幾星霜、常に心に係るまゝ、独り瞑想にふけたのは、経塚記念碑建立の誓願であった。

昭和56年春、同好の文化財調査研究会に提案して賛同を得、記念碑建立の気運はにわかには盛り上がった。幸いこのたび、妻沼小学校の一隅に、町長を始め町の有志の御賛同を頂き、立派な記念碑が建てられ、うららかな春日に照り映える姿をみて感慨無量なものがある。今後も町文化財の発掘に努力を重ねるとともに、ご協力をいただいた各位に対し、深甚なる感謝と敬意を表する次第である。

昭和57年3月

郷土の古代史を温ねて

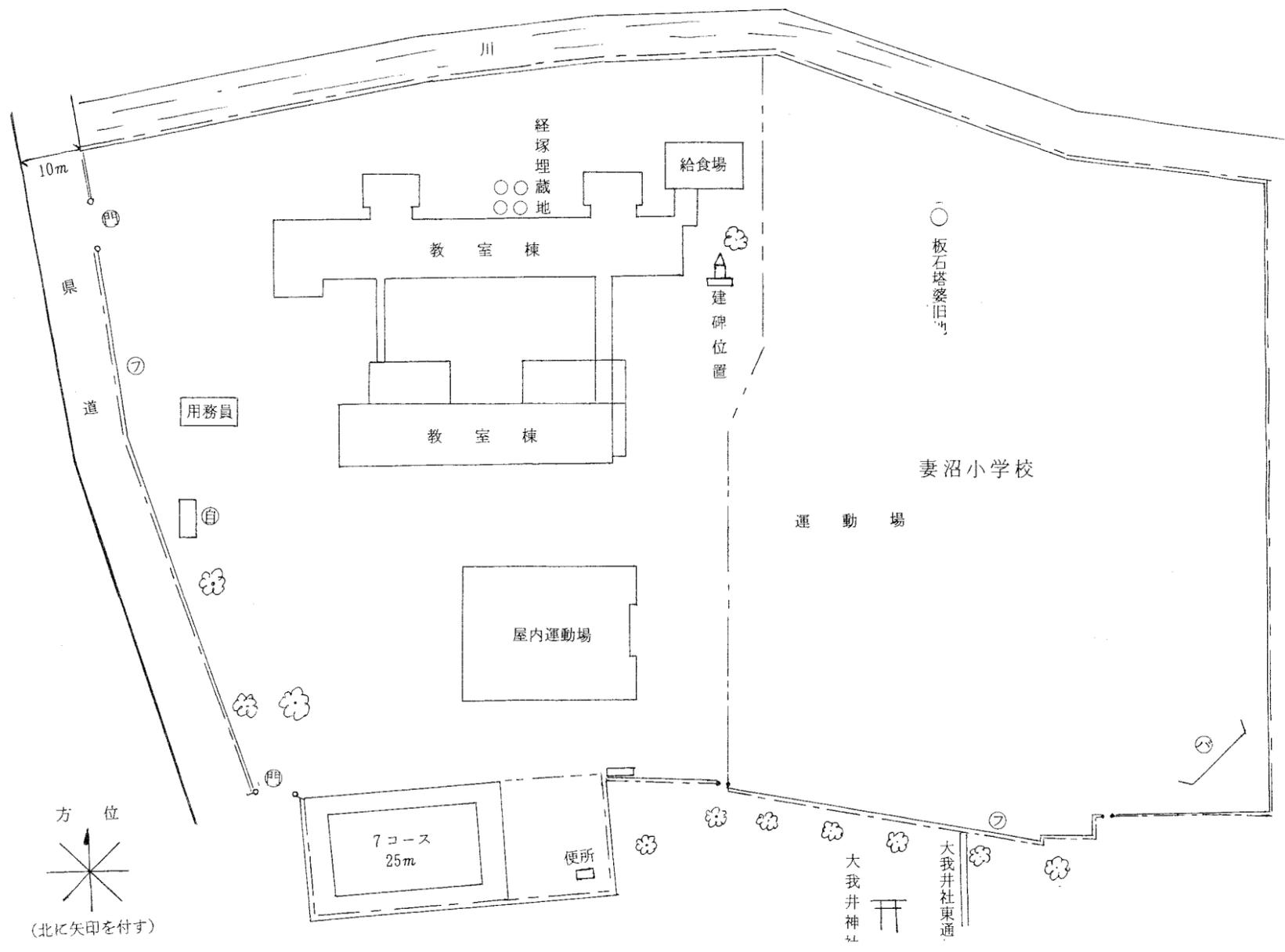
文化財調査研究会長 田 島 一 郎

経塚とは、本来経典を埋納した仏教遺跡をいいますが、その目的はお経を土中に埋めて釈迦の後継者である弥勒菩薩の出現まで保存することにあるといわれます。その思想的背景は主として末法思想にあります。時代を経るに従い「弥陀浄土」を願うもの、更に「祖先の供養」のため築造されたものと変化がみられます。埋納された経典には、中国において六世紀の僧、慧思が仏教の末法を痛感して金字の般若経及び法華経をつくり瑠璃の箱に納めた記録があります。経塚は、わが国独自のもので、時代的には平安中期から江戸期に及び、ほぼ全国的に築造されました。

妻沼町の大我井経塚は、平安末期、久安（1145～50）年間のもので、県内では最古のものに属し、しかもその出土状況が克明に解明されている点で、古代の貴重な遺跡であると云えましょう。

此度の経塚記念碑建立にあたって、碑面の題額に増田町長のご染筆をいただき、そして法要の御導師に歎喜院主鈴木英全師の快諾を得ました。更に町議員、文化財関係者、町民有志の方々から心温まるご賛同をいただいたことは建碑委員の一人として衷心より厚く御礼申し上げる次第です。最後に大我井経塚の建碑提唱者である丹呉邦晴師には建碑のため日夜主導的役割を果しご指導を頂きました事に対し深く感謝の意を表します。（大我井経塚除幕式に当り記）

昭和 5 7 年 3 月



大我井経塚埋納地点及板石塔婆旧地点

名 芳 者 贊 協 碑 之 塚 經

(順 不 同)

番号	氏 名	職 名	住 所	番号	氏 名	職 名	住 所
1	増 田 一 郎	妻 沼 町 長	市の坪225	18	増 田 昭 一	妻 沼 議 会 議 員	日向1133
2	高 橋 茂	“ 助 役	上根487	19	新 井 威 央	“ “	八木田286-1
3	小 池 篤 一 郎	“ 収 入 役	妻沼1409	20	中 島 宏 助	“ “	妻沼2455
4	増 田 稔	“ 教 育 長	日向1140	21	飛 田 佳 洲	“ “	男沼593
5	小 平 武 徳	“ 議 会 議 長	小島2697	22	松 本 照 三	“ “ (保 健 衛 生 委 員 長)	西野253
6	橋 本 礼 作	“ 副 議 長	永井太田402-3	23	金 谷 嘉 恵 作	“ “ (保 健 衛 生 副 委 員 長)	台80
7	森 谷 一 郎	“ 議 員 (総 務 委 員 長)	西城506	24	桜 井 光 平	“ “	葛和田825
8	手 島 寅 男	“ “ (総 務 副 委 員 長)	妻沼1417-1	25	斉 藤 正 慶	“ “	弥藤吾1971
9	中 川 実 郎	“ “	葛和田670	26	田 沼 照 稔	“ “	永井太田416
10	塚 田 茂	“ “ (経 済 委 員 長)	上江袋490-2	27	鈴 木 英 全	歆 喜 院 主	妻沼1627
11	高 田 瞭 蔵	“ “ (経 済 副 委 員 長)	妻沼1742-2	28	鈴 木 治 行	教 育 委 員 長	妻沼1493
12	原 口 善 弥	“ “	出来島120	29	横 倉 勤	教 育 委 員 長 職 務 代 理 者	間々田300
13	小 林 昭 三	“ “	大野878	30	吉 場 三 郎	“ 委 員	飯塚1857
14	須 永 邦 雄	“ “	善ヶ島175	31	森 田 竹 雄	“ “	善ヶ島495
15	萩 原 千 代 治	“ “	永井太田1227	32	石 井 金 平	妻 沼 町 文 化 財 調 査 研 究 会 顧 問	弥藤吾1969
16	田 野 茂	“ “ (文 教 厚 生 委 員 長)	間々田684-1	33	宮 島 俊 定	“ “	葛和田898
17	根 岸 正 司	“ “ (文 教 厚 生 副 委 員 長)	上根506	34	堀 越 敬 紀	“ “	弥藤吾1853

番号	氏名	職名	住所	番号	氏名	職名	住所
35	江利川 昇 一	妻沼町文化財調査研究会 顧問	葛和田 817	54	齊 藤 善 吉	妻沼町文化財調査研究会 理事	俵瀬 583
36	横 倉 喜久郎	" "	間々田 300	55	小 沢 栄 一	" "	葛和田 800
37	丹 呉 邦 晴	妻沼町文化財保護審議会 会長	妻沼 2485	56	清 水 平 治	" 専門調査員	妻沼 1360-1
38	備前島 賢 隆	" 副会長	小島 2770	57	堀 越 尚 二	" "	妻沼 1347
39	大 岡 安 雄	" 委 員	八木田 539	58	大 山 雄 三	" "	弥藤吾 1958
40	羽 鳥 清次郎	" "	善ヶ島 3477	59	出 口 喜 平	" "	弥藤吾 184-3
41	増 田 和 一 郎	" "	日向 873	60	宮 崎 弘	" "	妻沼 1550
42	田 島 一 郎	妻沼町文化財調査研究会 会長	妻沼 1348	61	前 原 儀 久	" "	妻沼 1499
43	堀 越 雄 一 郎	" 副会長	弥藤吾 1818-1	62	増 田 一 郎	" 監 事	日向 1165
44	舞 原 義 人	" "	葛和田 822	63	生 形 友 治	" "	台 90
45	田 島 善之丞	" 理 事	妻沼 1474	64	小 暮 千 吉	" 幹 事	妻沼 1521-3
46	金 井 清	" "	妻沼 1346	65	岡 田 広	" "	妻沼 1253
47	岩 上 寛 了	" "	男沼 45-1	66	佐 藤 浅次郎	" 会 員	妻沼 1656
48	齊 藤 正 木	" "	間々田 619	67	小 林 進	" "	妻沼 1250
49	田 中 馨	" "	小島 1926	68	木 村 幹 一	" "	弥藤吾 158
50	鈴 木 倫 一	" "	道ヶ谷戸 228	69	桐 生 勝治郎	" "	弥藤吾 162
51	鈴 木 茂	" "	飯塚 885	70	田部井 義八郎	" "	台 908
52	長 島 文 武	" "	上根 449	71	荻 原 竹 儀	" "	永井太田 1225
53	長 島 光	" "	上根 488	72	鈴 木 光 範	" "	永井太田 1172

番号	氏名	職名	住所	番号	氏名	職名	住所
73	大鷲 功	妻沼町文化財調査研究会 会 員	永井太田 478	92	田 沼 啓	県立本庄高校教諭	市の坪 481-2
74	羽 鳥 伊 久	” ”	善ヶ島 3458	93	木 村 稔	妻沼小学校長	弥藤吾 158
75	新 井 祐 二	” ”	ハツ口 862	94	大 槻 森 造	妻沼町文化財調査研究会 会 員	八木田 648
76	松 本 正五郎	” ”	西野 272	95	鈴 木 忠 芳	” ”	飯塚 814
77	石 川 一 由	” ”	葛和田 820	96	黒 沢 武 夫	” ”	飯塚 1894
78	増 田 貫 一	” ”	日向 1406	97	神 山 忠 之	” ”	妻沼 1634 -3
79	荻 野 員 雄	” ”	俵瀬 536-2	98	藤 野 珪 次	” ”	上須戸 860
80	清 水 統 男	” ”	俵瀬 793	99	滝 沢 恒 雄	” ”	妻沼 1369
81	齊 藤 啓 造	” (亡父良平供養の為)	俵瀬 132	100			
82	江利川 豊 吉	” 会 員	葛和田 802	101			
83	森 智 堅	” ”	間々田 19-甲	102			
84	金 井 薫	” ”	上根 454	103	堀 江 祐 司	堀江病院長	太田市高林 1800
85	吉 田 充	” ”	西城 428-19	104	田 島 孝	衆議院参事	北本市中丸 3丁目20
86	小 林 し ん	” ”	妻沼 1523	105	内 田 宗 治	前妻沼小学校長	熊谷市玉井 168
87	武 藤 長三郎	元教育長	葛和田 663	106	荒 川 弘	妻沼町文化財調査研究会 会 員	館林市上三林 1862-1
88	田部井 一 郎	田部井建設株会長	妻沼 1120	107	宮 崎 利 秀	北武蔵文化会主宰 (故人)	熊谷市大麻生 815
89	栗 原 登良吉	中央公民館長	妻沼 1433	108	高 田 武 男	妻沼町教委指導課長	江南村樋春 443
90	荻 野 六三郎	前収入役	俵瀬 154	109	中 島 浩 一	” 社会教育課長	熊谷市肥塚 1648 - 3
91	奈良原 春 作	郷土史研究家	上根 22				

大我井経塚建碑収支報告書

	昭和57年4月	
◎ 歳 入		円
経塚之碑建立寄付金	750,000	
町 補 助 金	310,000	
計	1,060,000	
◎ 歳 出		円
経塚之碑工事石材一式	500,000	
大我井経塚誌	135,000	
記念品和鏡文鎮 型代 80,000.- @ 850×200	250,000	
式典経費 賄費1人 1,000×125 並諸経費等	175,000	
計	1,060,000	

協賛金収支報告書

	昭和57年4月	
◎ 収入の部		円
協 賛 者 104人	1,080,000	
預金利子	960	
合 計	1,080,960	
◎ 支出の部		円
(イ)建碑に付町当局に寄付	750,000	
(ロ)妻沼町地名調査誌刊行に付寄付	330,960	
合 計	1,080,960	
差引残	なし	

建 碑 特 別 会 計	大 山 雄 三
文化財調査研究会監査	生 形 友 治
“ “	増 田 一 郎

妻沼経塚調査報告書

埼玉県大里郡妻沼町教育委員会



序

近年「文化財ブーム」という新語が生まれてまいりました。これも文化財保護法制定により、文化財の価値が一般に知られた結果だと思えます。私達は先人の残した文化財を発見し、保存し、研究して国民文化の向上に資することは、まことに意義深くよろこばしい次才であります。

今回わが妻沼町において、平安末期の経塚群を発見し、県文化財専門調査員小沢国平先生の指導により、町教育委員会で調査いたしました。その遺物が貴重な文化財として文部省に保管されることになりました。

当委員会では、これが調査報告書を編み、大方諸賢の御参考に供し、よい資料となれば幸いです。

昭和34年10月7日

妻沼町教育委員会

教育長 武藤長三郎

まえがき

夫木集に光俊卿が詠める大我井の杜は今の聖天境内、小学校、大我井神社附近一帯の台地で伊弉諾伊弉冊二柱の鎮座の聖地であつた平安の昔摂政関白藤原伊尹の子左近衛少将義孝は西城に館を構えて子孫此の地に居住し、六代の孫助高は式部大輔で大我井の聖地とは極めて縁り深いものがあつた。又斎藤実盛は清盛の命によつて長井庄を領しこの地に歓喜天を祀りて深く帰依したことは聖天宮縁起や武蔵風土記稿に伝える所で、平安時代既に是れ等の人々によつて京の文化がこの地へ伝えられていたことは想像出来るのである。たまたま昭和32年秋往時の大我井の杜であつた小学校庭から経塚群を発見し、経筒、和鏡など多くの埋蔵品を発見したが、文部省の審査の結果貴重な文化財であることが認められ国の管理に移されたことは当町の古代文化を物語るものとしてまことに慶賀に堪えない。これらの事蹟を後世に伝え、且つは考古学の参考資料として全国に紹介するため今回本県文化財専門調査員小沢国平先生指導のもとに本書を作成したのである。願わくば文化財の参考資料として汎く活用されることを期待して止まない次才である。

昭和34年10月7日

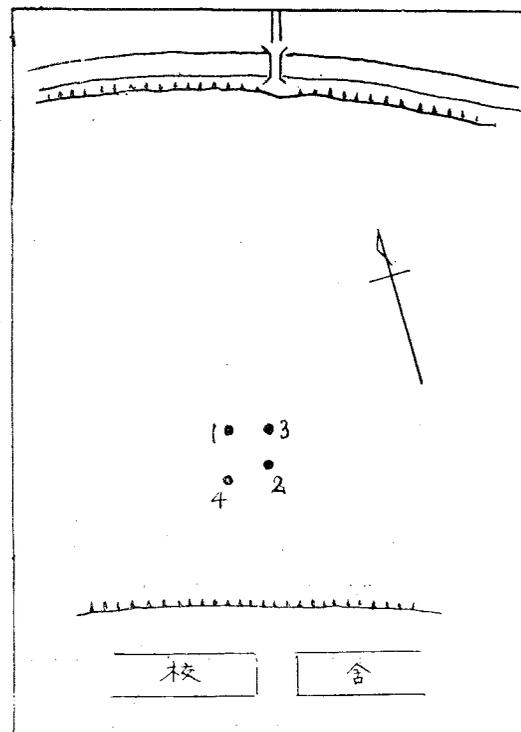
妻沼町文化財保護委員長

妻沼町文化財調査研究会長

茂木雅太郎

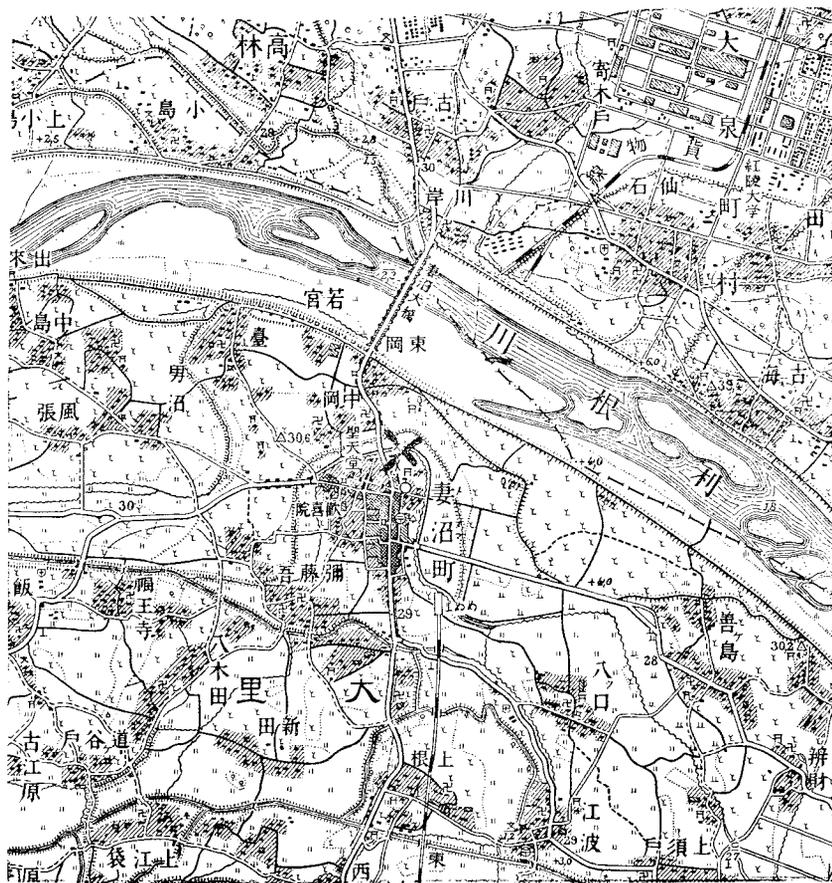
目 次

序	文	1
ま	え が き	1
目	次	2
経	塚 位 置	2
経	塚 遺 跡 附 近 地 形 図	3
遺	跡 及 び 遺 跡 調 査 状 況 遺 物 写 真	4
発	見 経 過	12
遺	跡 の 場 所	12
遺	跡 の 環 境	12
遺	跡 概 況	12
	才 一 号 跡	13
	才 二 号 跡	14
	才 三 号 跡	14
	才 四 号 跡	16
	才 一 号 跡、才 二 号 跡 遺 跡 及 び 遺 物 の 図	18
	才 三 号 跡 遺 跡 及 び 遺 物 の 図	20
	才 四 号 跡 遺 跡 及 び 遺 物 の 図	21
考	察	23
経	過 概 要	26
あ	と が き	28



経塚位置
印遺跡

0 ————— 20M



才一 圖 妻沼經塚遺跡附近地形圖
 ※ 遺 跡

$\frac{1}{50,000}$



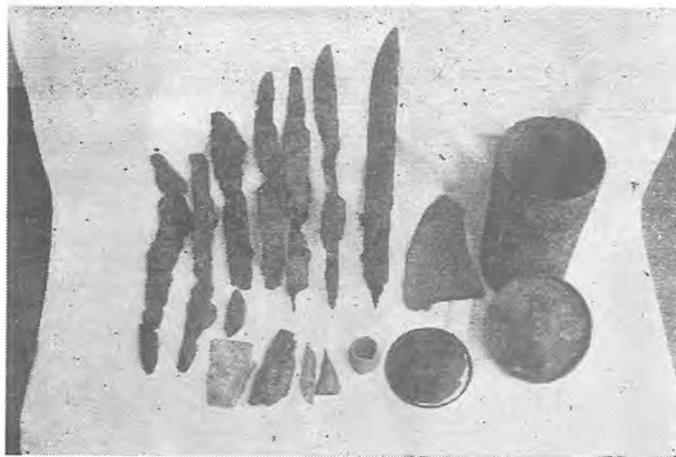
遺跡発見場所遠影
(整地後の写真)



才一
才二
号跡
調査
状況



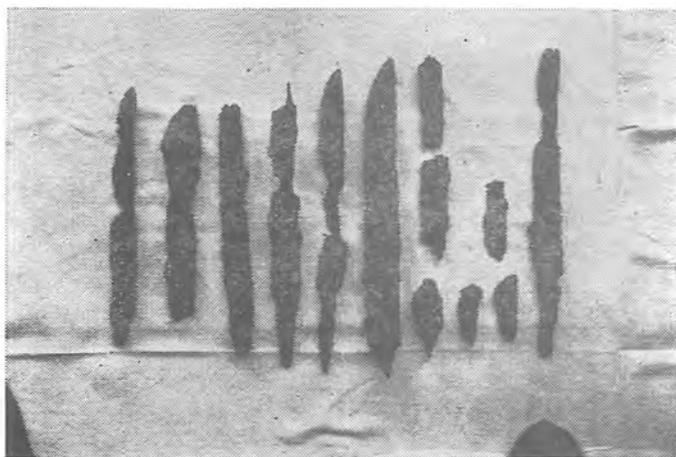
才一
号跡
現場



才一号、才二号跡遺物



才一号跡徑筒



才一号跡刀子



才二号跡和鏡



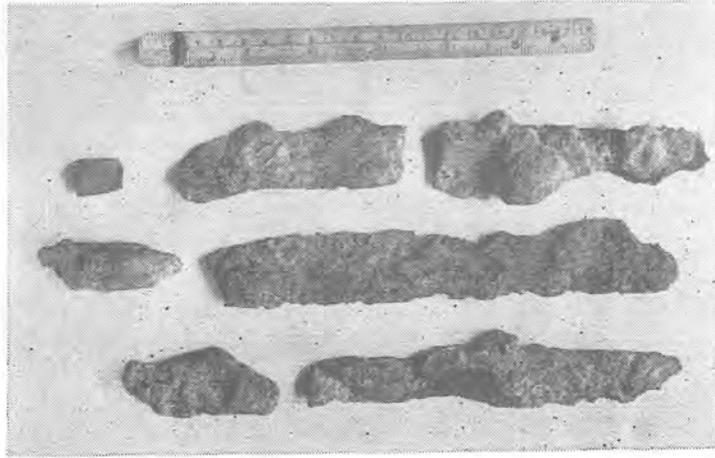
才
三
号
跡
調
査
状
況



才
三
号
跡
遺
物



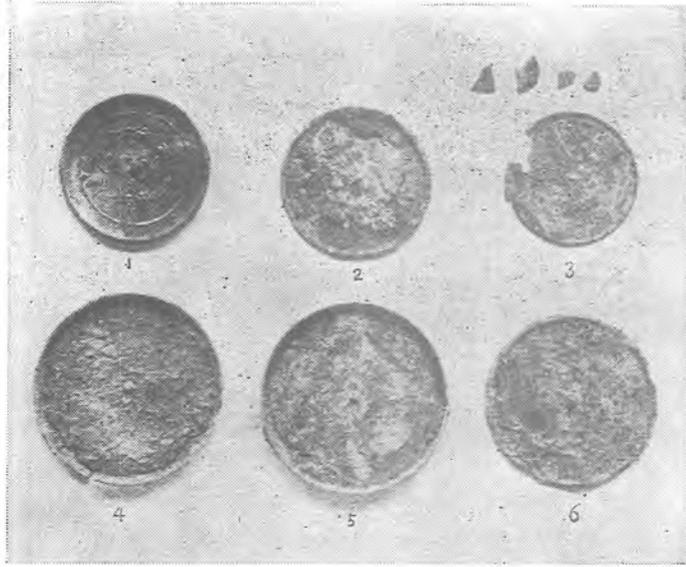
經
筒



刀
子



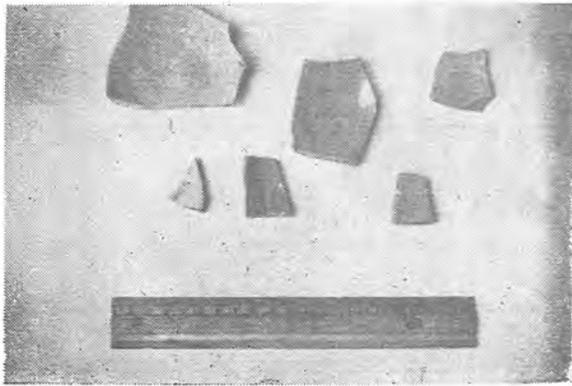
櫛



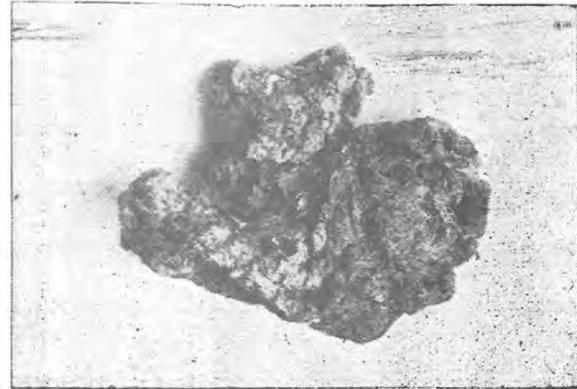
和鏡



才三号跡遺物
花瓶



磁器



腐蝕したる経文



才四号跡 出土状況



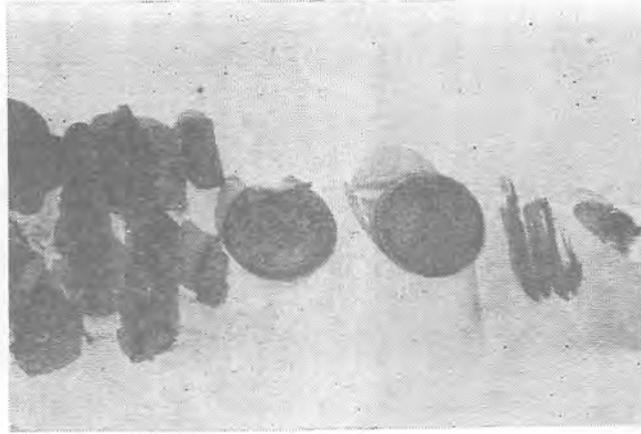
才四号跡 甕 跡



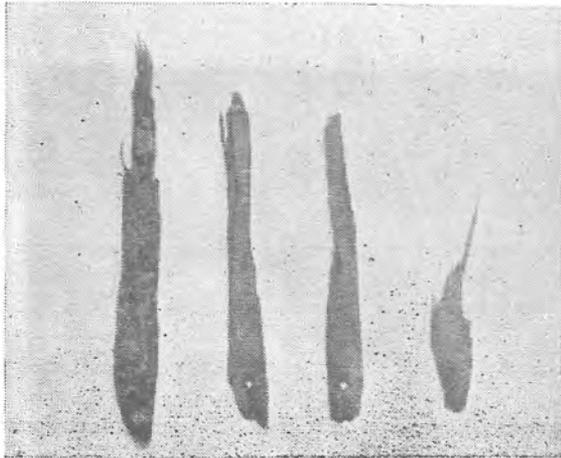
才四号跡 遺物甕(その一)



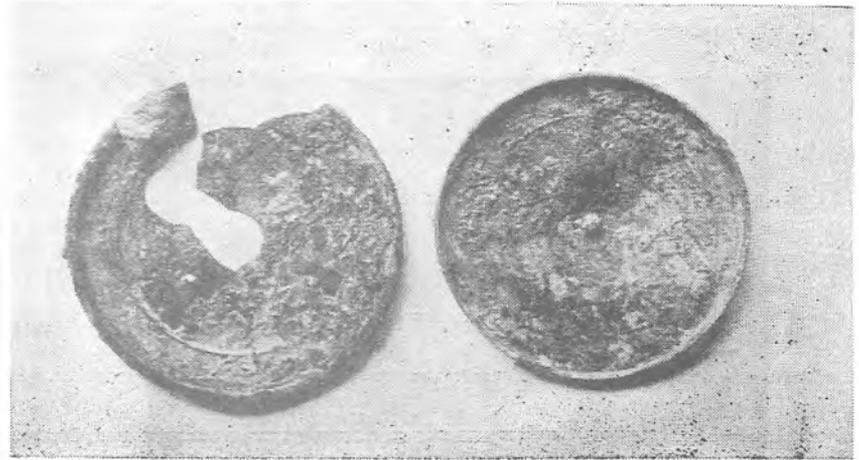
才四号跡 遺物甕(その二)



才四号跡遺物



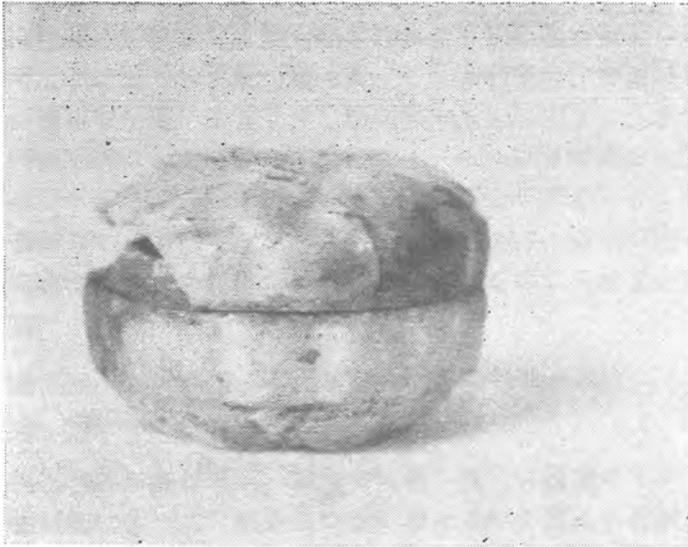
扇



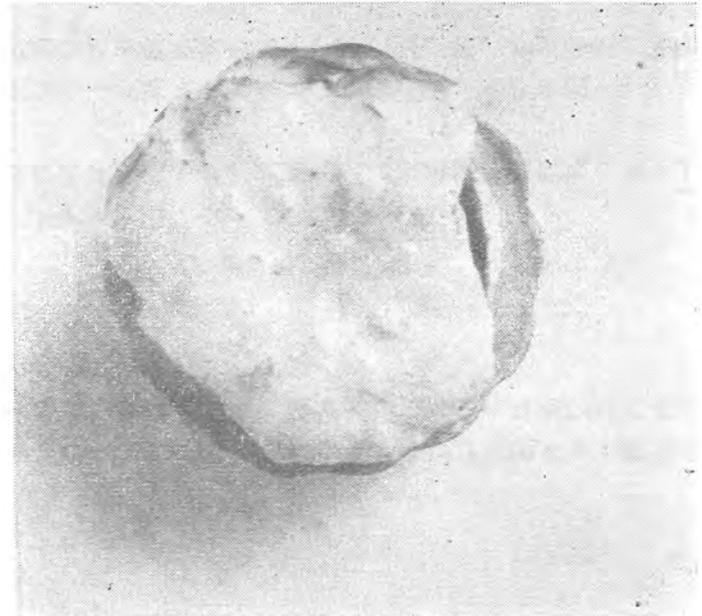
和

鏡

合 子
(才四号跡 遺 物)



(そ の 一)



(そ の 二)

妻 沼 経 塚

1、発 見 経 過

埼玉県大里郡妻沼町立妻沼小学校に於て校庭拡張のため整地作業を行ったところ、昭和32年9月16日同校6年3組児童及森教諭によつて、河原石の特に集つている箇所を見出した。教育委員会は之を或る遺跡として県文化財専門調査委員小沢国平氏に報告した。調査の結果、遺跡は経塚なることを確めたのである。

2、遺 跡 の 場 所

埼玉県大里郡妻沼町大字妻沼2492番地

3、遺 跡 環 境

遺跡は沖積地が利根川に浸蝕されて残されたと考えられる台地の辺縁部にあり、北方一面は水田地帯の低地となり、この地点から北方500メートルに利根川がほぼ西から東へと流れている。

台地を見るに殆ど粘土質であるのは、此の台地もかつて利根川による沖積地であつたことを物語る。(才1図)

経塚遺跡は小学校舎の北方約20メートル地点にあるが、この附近から古墳時代の高坏、坏、壺、等、の土師器、須恵器の破片が一面に発見され、経塚群の東には巾1メートル、長さ3メートルの地域の焼跡一或は窯跡か一などがあるので古くから人々の生活の場であつたと思われる。尙附近には平安時代創立という聖天堂、経塚の東方50メートルの地点には鎌倉時代の青石塔婆一昭和16年4月国認定一があつた。

この青石塔婆は、最近まで妻沼小学校にあつたものを現在では他へ移したが最初のはこの経塚遺跡内にあつたと里人は語つている。共に注意すべきことである。

4、遺 跡 概 況

4ヶ所に遺跡が発見された。之を才1号跡～才4号跡と名づける。相互の位置は大略才2図の如くで才1号跡は校舎から北20メートル、才2才4号跡は才1号跡から各4メートル、才3号跡は才1号跡の東3メートルの位置にある。

埋納遺物は次の表の如くである。

埋 納 遺 物 一 覧

経塚号跡	経筒	甕	経巻	刀子	合子	和鏡	華瓶	扇	櫛	小埴	土師破片	磁器片	発掘月日
1	1			10						1	多		9. 1 6
2		1				1							"
3	1		1	多		6	1	1	1		多	少	9. 2 5
4		1		5	1	2		1			多	少	1 0. 3

才 一 号 跡

才一号跡は、現在の校庭地表から1メートル程の地下に河原石の集りを発見した。

中央に銅製経筒が蓋をしたまゝ立てゝあり、其の経筒の周囲には7口の刀子がこれを囲んで水平に置かれてあり、尙、土師小埴を発見した。底、周囲、天井は大きさ20センチ内外の河原石を積む。塚内部は木炭片と土とをもつて埋めている。塚は円形で直径90センチ、深さ25センチ程と推定される。(才三図)

A、経 筒

経筒は鑄銅製で被蓋式で筒の直径12センチ、低径11センチ、高さ(外側)22センチ、蓋の直径12.2センチ、蓋縁の高さ1.5センチ厚3ミリの完形である。(才四図) 経筒上縁から3センチ下に墨書がみられる。外にもあることは推定出来るが緑青のため不明である。文字はツ安と判読し得られる。この経筒外面には紙屑と思われるのが附着していた。蓋の内面には経巻の置かれた小口の跡が5巻分残っている。この配置からみると恐らく8巻であろう。経筒の中には何も認められなかつた。

B、刀 子

刀子の出土数は約7本が数えられるが錆汚れが甚しい刀巾が広く4センチに及び長さ30センチ内外、茎は何れも短いようである。(才5図) 刀子の残塊であるが、外に15をあげられる。(19P刀子)

C、小 罎

高さ4センチ、口径3.5センチ、円筒状の粗雑な土師器(完形)である。(才6図)

才 二 号 跡

本遺跡で注意すべきことは、用いた石の数の極めて少いことであるが、或はかつて他に移動したのであろうか。(才7図) 甕の上半部が失われて発見されたことを考えると、このことが推定できる。甕の中には和鏡一面と紙であつたであろうか、土状になつている褐色の物質によつて埋まつていた。

和 鏡

直径10センチ、振菊座鈕で双鳥が花の開いた山吹の間に飛ぶ。所謂、山吹双鳥鏡であり、文様も明で平安鏡の特色をよく現している優雅な鏡である。

才 三 号 跡

校庭地表面下約20センチ下に、河原石を敷並べ、石以下1.10メートルで底に達する。塚内部は、長径2メートル、短径1.80メートルで、中央に鋳銅製経筒があり、経筒には台石、又特に大きい覆石がある。その周囲に5・60口の刀子を置く、和鏡は台石の下に3面、外周に3面、計6面を発見した。鍍金銅製花瓶が北西の壁にあつた。

この経塚内には多数の木炭細片が土と混交していたが注意さるべきは金粉の土中に見えることである。

尙、檜扇の一部と思われるものが発見された。(才9図)

A、経 筒

経筒は鋳造製で高さ22.5センチ、直径13.2センチある。蓋は宝珠形の把手があり、有節で高さ6.5センチある。筒の高さ

17センチ（才9図）中には、経巻4巻だけそのまゝの形を現し経巻を結えた紐2本の様子も認められたが著しく変質して粘土状となつている。（才10図）

経筒の撮は筒内にあつた。長さ40センチ、巾22センチの重石のために接合部（撮丈は接合したものと認められる）が離れて、筒内部に落込んだものである。台石は特に選んだであろう。長さ34センチ、厚さ8センチ角柱の安山岩で上面には、経筒の底の部分に応じて円形のくぼみがつけてある。

B、刀 子

刀子の配置状態は才8図の如くであるが、この遺跡のものは才1号跡に比べてさびも強く完形に近いものは見当たらないが其の数は数10本に達するであろうと推定する。北西の隅には15、6口が束ねてあつた。（20P刀子）

C、和 鏡

和鏡は6面共平安鏡であるが文様は何れも鮮明でない。

鏡番号	直 径	縁	背 文
1	10.9 センチ	外 傾	山吹(?) 双鳥 (表面布目あり)
2	8.5	内 傾	草 花 双 鳥
3	7.6	内 傾	不 詳
4	10.0	内 傾	不 詳
5	10.0	直	素 文
6	9.0	蒲 鉾	不 詳

上記の2、3、4面は経筒台石の下に、2は表面を上にし又3、4は背文を上にして重つており3と4との間には櫛が置い

てあつた。鏡の置かれた位置で6は垂直に置かれていたが他の五面は何れも水平であつた。

D、銅製花瓶

塚内北西の隅で東ねた刀子の側から発見した。高さ5.4センチの小形ではあるが入念に造られ鍍金の様子が残つて見える。底部がぬけているが原形のまゝではないであろう。(才10図) 完形の美しいもの。

E、櫛

木製で才11図のような形をしている。現在長5.5センチ、巾3センチ、上部は3ミリの厚さである。歯先に至るに従つてうすくなる。

歯の部分は失われているが図に見る如く3つの孔があり、出土当時はこれに細紐が通してあつた。2面の和鏡の間にはさまつて発見された。

F、檜扇

壙の東壁の河原石の面に長さ7センチ程の部分に銀色雲母様のものがベツトリ附着し、その中に金糸2本があり4～5本の黒い糸(木?)が並んでいた。檜扇の残欠ではないかと考えている。

G、磁器

3個が、経筒の周囲から発見された。何れもその残欠でその1片は長さ7センチ、厚さ3ミリ内外の小皿である。(才12図)

才 四 号 跡

地表を整地したので原形は明でないが、深さ68センチ、直径2メートルの壙であり、中央に現在高40センチの大甕を置き、その上には80×76センチ、厚さ6センチの絹雲母片岩を蓋としてある。

甕の中には拳大の河原石が約10個と口縁、肩部の甕の破片が下半部につまつていただけである。甕を中心とし壙の壁に近い部分に河原石が積まれ、その附近に刀子、和鏡2面、合子1ヶ、檜扇が発見された。(才13図)

A、甕

深さ41センチであるが、口縁部を測定複元してみると大体才16図の形となる。口縁から肩部に灰がみえる。下半は淡褐色、口縁部は著しく折曲げられて時代の特徴を現わしている。厚さ1センチ、平底である。

B、和鏡

一面は、直径10.5センチ、他は9.8センチで両者共平安鏡であり、前者は背文を上にならされていた中央部と外区の1部を欠く白銅製の草花双鳥鏡と見られる。後者は河原石の上に直接表を上にして置かれ極めて鈕の小さいもので檜垣と小鳥の文様がある。縁は共に外反式であつた。

C、刀子

完形のものなく10ヶ程の鉄塊状となり壙の壁附近に中心の甕をめぐつて発見された。

D、合子

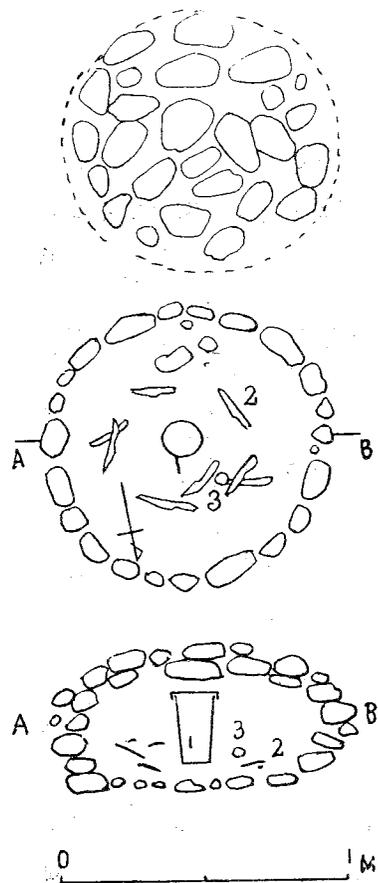
壙の東壁に発見された。印篋蓋、糸底のつくりで直径4.2センチ、高さ2.5センチの青白磁で花模様によつて形づくられている。蓋の高さは1センチ程で中央部はくぼんでいる。(才14図)

E、檜扇

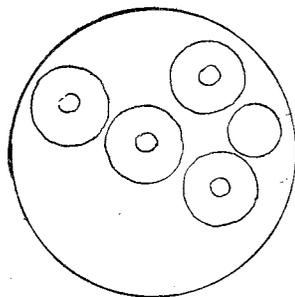
壙の北部に檜扇の骨が置かれてあつた。木製で現長さ14センチ、要の方から9センチの部分は、巾1.5センチとなりその上はサ、ラ状となる。(腐朽のため)要の部分は孔だけで附属品はない。何枚重なつていたか不明であるが、現在数えたところでは6枚位に見える。(才15図)

F、白磁

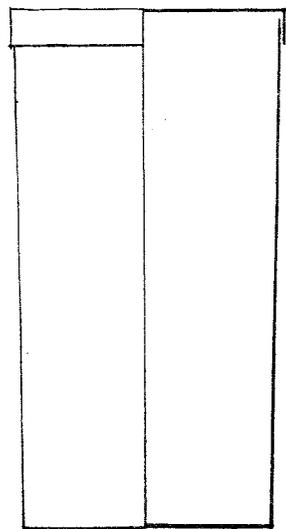
3×6センチ、厚さ3ミリの白磁片があつた。



才三図 才一、經筒二、刀子三、小罎



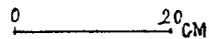
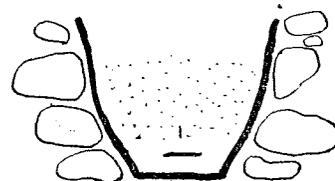
才四図 才一号跡 經筒



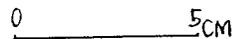
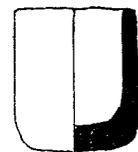
蓋の内面



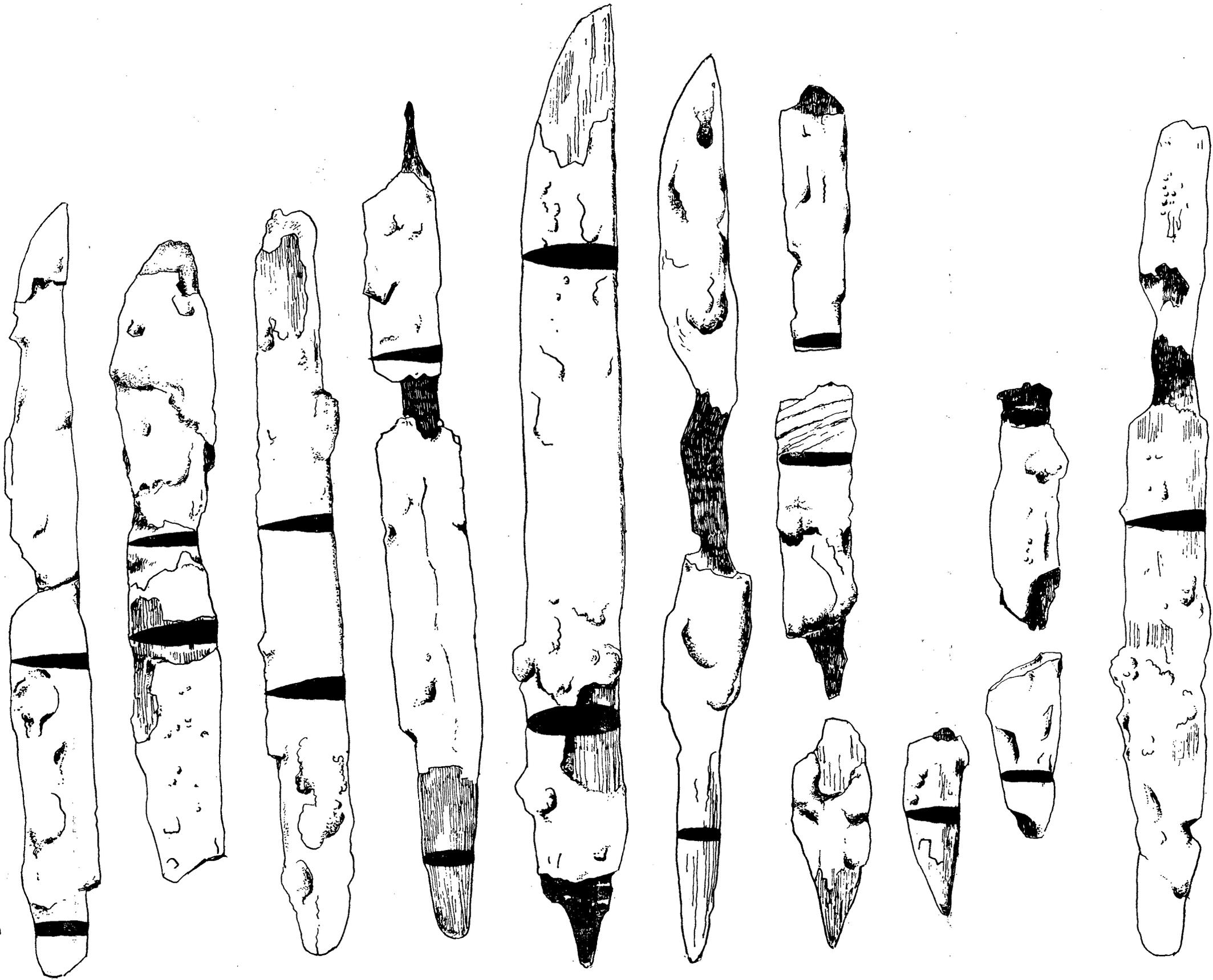
才七図 才二号跡 1,和鏡



才六図 才二号跡出土 小罎



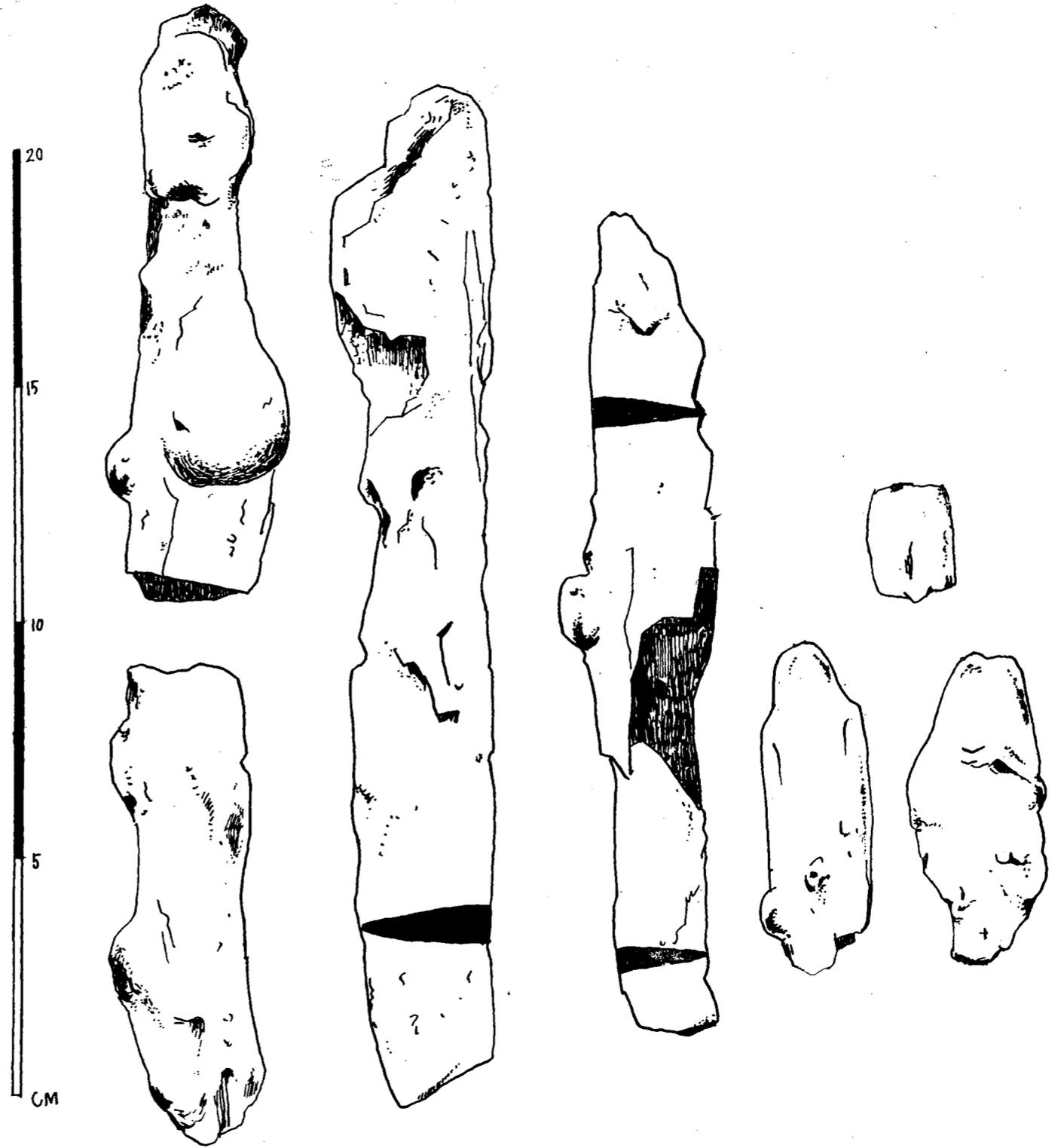
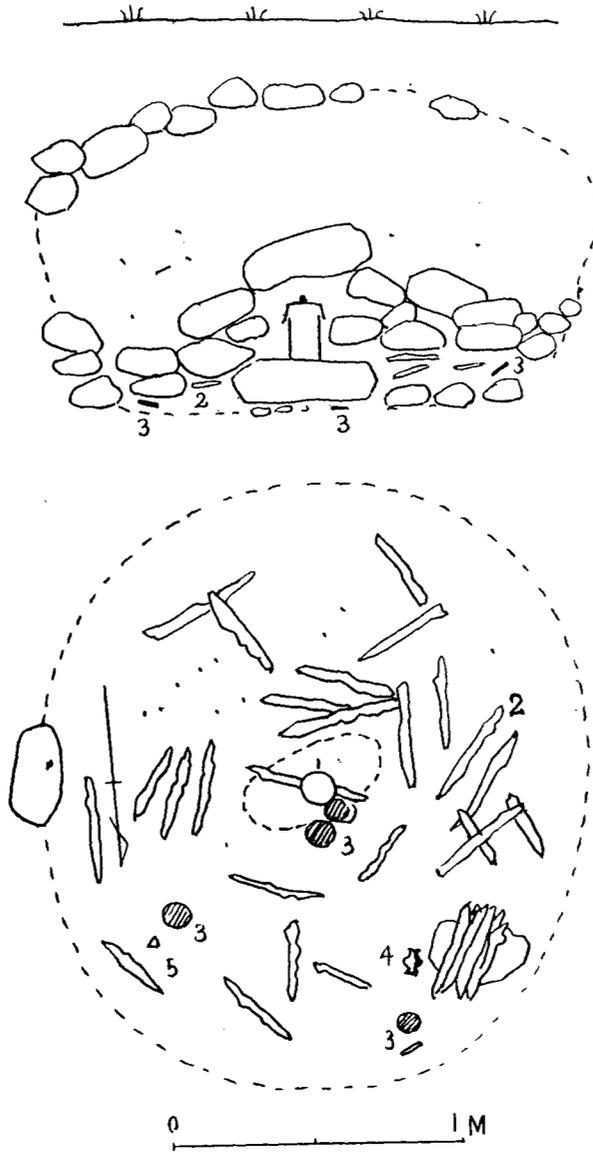
20
15
10
CM

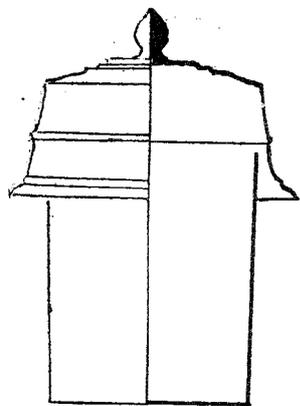


幸沼経塚出土(第一組)

才八圖 才三号跡

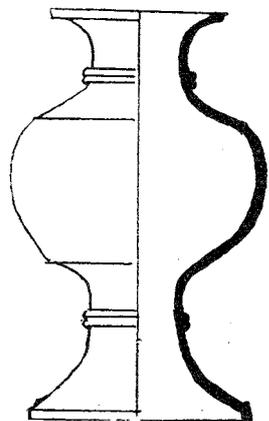
1. 經筒 2. 刀子 3. 和鏡
 4. 花瓶 5. 陶磁片 6. 檜扇
 7. 木炭片



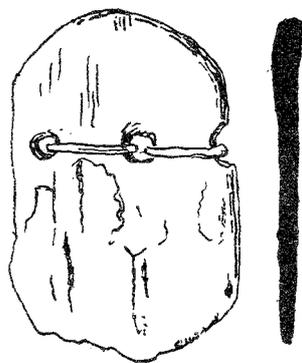


才九图
才三号跡
筒

0 10 CM



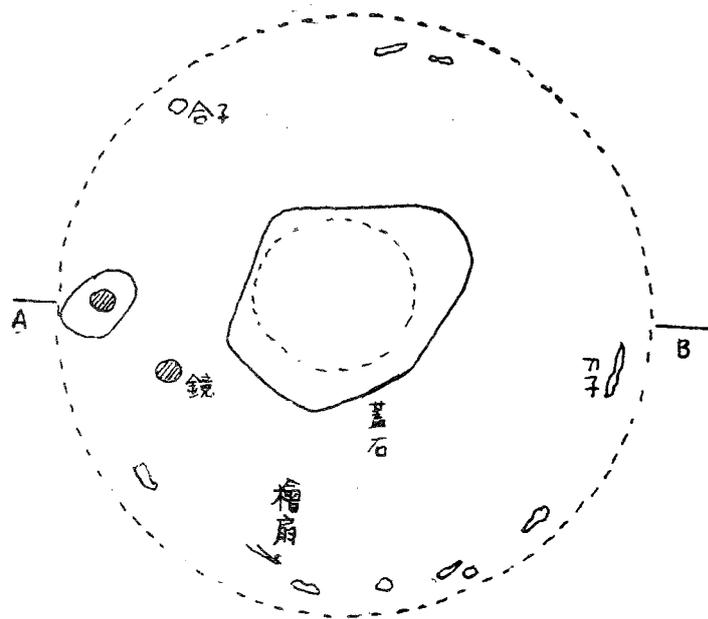
才十图
才三号跡
瓶



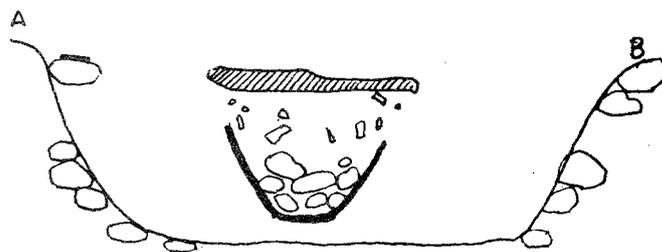
才十一图
櫛 (実大)



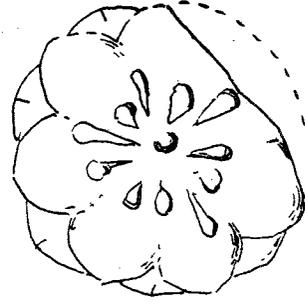
才十二图
才三号跡
小皿残欠



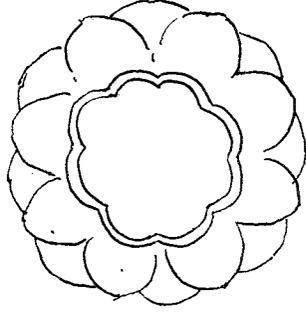
才十三图
才四号跡



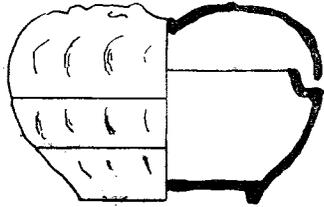
0 1 M



才十四圖 青白磁合子(実大)



表面

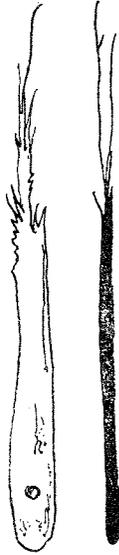


裏面

才十五圖

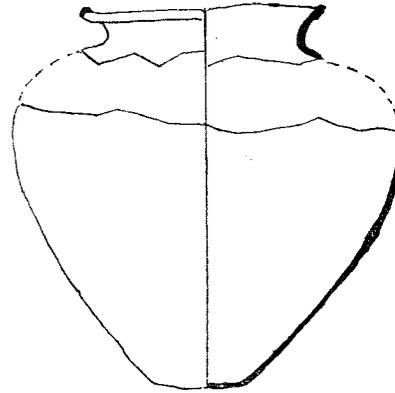
檜扇

$\frac{1}{2}$

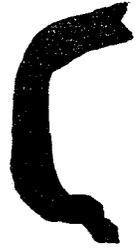


才十六圖

甕



0 30 CM



考

察

経塚は平安時代中期から行われた埋経の遺跡で、高さ0.6～1.00メートル、直径1.50メートル内外の円い塚が普通であり、この中に写経を経筒に入れ外に仏像、仏具、鏡、刀子、銭貨、合子、檜扇等と共に埋めるのである。経塚に経文を埋納するのは「末法の世に仏法地を払い、經典が亡んで56億7千万年後に再び出現する弥勒の説法に当つて、經典の無いことをうれえて之に備える」と云われている。然し時代の移るに従つて単に経文の書写や読誦の功德によつて自己の報果を希うための経塚となつた。

本遺跡出土の二経筒は共に銘を知ることは出来ない。然し才一号跡出土のものには不完全ながら墨書がある。但しこの文字は紀年のみであるので埋納願意は知る由もない。

妻沼経塚の年代はいつ頃のものであろうか、今これを端的に教えるものは才一に経筒にかゝれた墨書紀年であるが前述の通り「安」は明らかであるがその上の文字は解明出来ない。墨書はいつ頃から経筒に書かれたかをみると、既に平安後期仁平二年(1152)筑前大宰府大原野出土の経筒に例があるから妻沼墨書経筒もこのことを考えに入れてよかろう。二字からなるこの年号は次の如き想像が許される。二字からなるこの年号は次の如き
保安(1120) 久安(1145) 承安(1172) 弘安(1278)

この中、久安、承安が最も近いように思うが更に考える必要はある。

才二には経筒そのものについてである。

経筒の高さは時代によつて異なることを石田茂作博士は示している。それによると、

- | | |
|---------------------|------|
| 1、高さ21センチ以上、24センチ前後 | 藤原時代 |
| 2、高さ18センチ前後 | 鎌倉時代 |
| 3、高さ9～12センチ前後 | 室町時代 |

とされている。妻沼経筒は、一は22センチ、他は21センチ(共に外側測定)であるので平安時代とみて差支えなからう。又才三号跡の蓋が有節であるのも鑄銅と共に当時代の特徴とされている。

才三に甕であるが、経筒の外容器に使用された他地方のものと比較してみると、大体平安～鎌倉時代に比較し得られようと

思う。妻沼出土才16図の如く口縁の折り曲げられたものは鎌倉式の端造りの前駆をなすといわれている。厚さは一センチ内外であるが、この厚さも平安時代に多い。然し甕の時代を形のみによつて判定することの不注意であることは勿論である。

才四 鏡が平安鏡であることをもつて直にその経塚が同時代とはいへ得ない。比企郡利仁塚の経塚の銘は建久七年の鎌倉時代であるが伴出鏡は四面共平安鏡の例がある。然し本遺跡出土鏡が九面共平安鏡であることは他の遺物と併せ考えて当時のものであつたらうことがうかがわれる。

才五 合子は「時代的には藤原、鎌倉初期の経塚に限られる」（矢島恭介氏）という。妻沼出土青白磁合子は恐らく藤原時代とすべきでろう。

以上種々の遺物から見て本経塚が平安時代であろうことを提唱するものである。

経塚の構造については遺跡概況のところ述べて通り河原石の積石による石室の中に経筒を収め経筒の周囲に刀子、和鏡その他を取めた。石室内は多量の炭を土に混入してあるのは他地方のものと同様である。但しこの経塚の原形、即ち表面はどうなつていたであろうか、小さな墳丘の上に何か標示石でもあつたかは今回の整地以前から知られていなかった。経塚の上に何等かの標示があることは宝箱印塔、五輪塔、石塔婆、経碑が建てられてある例の報告がある。青石塔婆を建てた例も二、三ある。

善光寺三尊を彫した高さ1.5メートル青石塔婆（鎌倉時代）がこの経塚群に接して、かつて立てられてあつたことは本経塚と何等かの関係があつたであろうか、一応は注意してよからう。

甕が経筒の外容器に用いられ、又その用途以外にも用いられている場合がある。甕の中には才四号跡経塚の如く単に拳大の河原石のみであり、才二号跡経塚は小埧と鏡一面だけである。此の中に経筒は勿論無く経文の存在も明らかでなかつた。

経塚に経筒の外に壺のみを出した例は知られている。熊野新宮市神倉山経塚才二経塚で三ヶの壺が併出し、A壺の中には礫石経が満され、B壺には念珠、合子、和鏡、経巻の残欠、C壺は土砂のみであつたという。

妻沼才四号跡の甕中の河原石を注意を払つてみたが経文の墨書らしいものは見当らなかつた。がさりとて自然に口縁部など一しよに落ち込んだとするには一寸説明がつかないが紙片の腐朽したと思われるものが土と混交しているので経文を納めたとも思われる。才二号跡は神倉山才二経塚Bに相当するものか。

合子は一部破損しているが復元可能でその形は明らかである。平形合子印籠蓋で蓋と身の側面を菊座形に彫り、その低い部分に青つやが美しく沈み所謂「影青」（いんちん）の名にふさわしい。現在では一般に宋代中国景德鎮窯のものといわれ

ている。合子の経塚に於ける用途は不明であるが、強いて求めれば香合として考えられるという。この北宗の合子が妻沼の地に如何にして伝えられたかを想うとき、その経路を尋ねることも意義があることであろう。

扇は何れの経塚も檜扇とある。檜扇の出土は簪と共に全国でも稀である。材は檜を薄板として上部を糸で綴ち表裏に雲母を刷いてこれに金銀の切箔を散し彩檜を施すが一般である。才三号跡の河原石の面に胡粉用の雲母が一面に附着してこれに金糸が配してあつたのは檜扇の痕跡と思う。才四号跡からは明に檜扇の骨が出ている。その数は位官の高下によつて12橋から25橋と定められてあると云うも出土品はその数は明でないが貴重な史料である。

簪、櫛も全国に於て二～三経塚出土があるのみで極めて稀である。櫛が才三号跡出土の如くほど原形を保つていたことは鏡間に埋納されていたためであろう。檜扇と共に貴重なものと云えよう。

経塚を築造する位置は霊地霊域を選び殊に名刹神社の境内にその例が多い。この妻沼経塚遺跡の地は、その頃どんな状態であつたか、県史によれば延喜式神名帳（延喜五年）に載せた幡羅郡四座の内の白髪神社は「現今其の鎮座の場所不明であるが諸書に多く大里郡妻沼町大我井森と云うのがあり白髪明神の故地で後世同町歆喜院の聖天となつたから今は神社として存せないと云われる。」又、同史は平安時代仁安年中の創建仏堂として妻沼町聖天堂を挙げている。尙、同町聖天堂の縁起にも、同所は仁安年間斎藤別当実盛が長井庄を領する以前から已に建立されてあつたと述べているので平安時代已に由緒の地として知られていた。

此の遺跡附近の地名に烏森、錦森、西森廻、東森廻、森下等のあることから当時でも相当の幽すいの地帯であつたと思われ、この地に経塚の営まれたのも当然であつたろう。

県内に於ても比企郡平沢寺（平安時代）、比企郡野村利仁神社（鎌倉時代）から経筒の発見はあつたが今回は経筒二基の外稀品の出土もあり更にその遺構の大体を知り得たことは本県経塚研究資料の大きな収穫であつたことを疑わない。

経 過 概 要

- 昭和32年 9月16日 妻沼小学校長（武藤長三郎）より午前9時過電話にて、教育委員会（教育長荻野六三郎）へ埋蔵文化財を発見した旨連絡あり、県教育委員会へ連絡すると同時に、県文化財専門調査員小沢国平先生へ連絡し、午後小沢先生の指導により、妻沼町文化財保護委員、妻沼町文化財調査研究会役員、妻沼小学校の協力を得て才1号、才2号経塚遺跡の調査を行う。
- 昭和32年 9月25日 妻沼小学校より、午前10時過才3号遺跡を発見した旨町教育委員会へ連絡あり。午後小沢先生の指導により、妻沼町文化財保護委員、全調査研究会役員、妻沼小学校及び同校P、T、A役員の協力を得て調査を行う。
- 昭和32年10月 3日 妻沼小学校より午前9時過、才4号跡を発見した旨連絡あり、午後小沢先生の指導により、妻沼町文化財保護委員、妻沼町文化財調査研究会役員、妻沼小学校及び同校P、T、A役員の協力により調査を行う。
- 昭和32年12月20日 県教育委員会を通じ、国文化財保護委員会へ遺跡（才1号～才4号）発見届出（さきに才1、才2号跡の届出すれど一括届出することにする）県教育委員会へ埋蔵文化財保管届出。熊谷警察署へ文化財発見届出。
- 昭和32年12月20日 町教育委員会、町文化財保護委員会にて発見、調査経過報告を行う。
- 昭和33年 2月20日 文部省技官齊藤忠先生、小沢国平先生、県教育委員会社会教育課文化財保護係長 大護八郎先生来町し、経塚遺跡及遺物の調査を行う。
- 昭和33年 3月25日 町教育委員会は、町文化財保護委員会の答申により遺物は、町に適切な施設なきため、国へ保管を移すことに決定する。
- 昭和33年 4月22日 県文化財指定申請を行う。
- 昭和33年 5月20日 県文化財専門調査員小沢国平先生、県社会教育課文化財保護係、柳田敏司主事来町し県文化財指定申請に基く調査を行う。

- 昭和34年 2月12日 県教育長より、昭和34年 1月24日付地文記第1013号で文化財と認定された旨通知を受ける。
- 昭和34年 2月13日 文部省三宅技官、県文化財専門調査員小沢国平先生、県文化財保護係柳田主事来町し、経塚、遺物一括を文部省へ引渡す。
- 昭和34年 6月 1日 県教育長より、国文化財保護委員会より経塚、遺物一括国で保有することになった旨通知を受ける。
- 昭和34年 6月11日 熊谷警察署より、経塚、遺物一括所有者が判明しない旨の証明書を受領し県教育委員会を通じ国文化財保護委員会へ提出する。
- 昭和34年 8月10日 国文化財保護委員会より、報償として、町（土地所有者）へ75,000円町教育委員会(発見届出者)へ75,000円を受領する。
- 昭和34年 9月16日 妻沼経塚調査報告書作成のため石川社会教育係長、小沢国平先生の指導を受け、調査、研究資料の提供を受ける。
- 昭和34年 9月25日 妻沼経塚調査報告書作成打合会議を役場会議室において行う。
- (出席者) 町文化財保護委員長 茂木雅太郎
 全 副委員長 大岡安雄
 町文化財調査研究会副会長 森田栄三郎
 全 幹事 田島一郎
 (町教育委員会学務係長)
 町教育委員会社会教育係長 石川一由
- 昭和34年10月 7日 妻沼町公民館において、県文化財専門調査員小沢国平先生、県教育委員会社会教育課長全文化財保護係長を招き、妻沼経塚調査関係者及び来賓多数を迎えて、妻沼経塚調査報告を開催する。

後 記

妻沼経塚遺品は、昭和34年2月13日文部省へ引渡しましたが、これが調査に当りましては、埼玉県文化財専門調査員小沢国平先生の特別なる御指導のもと、妻沼町立妻沼小学校及び同校P・T・A役員、妻沼町文化財保護委員、妻沼町文化財調査研究会、役員の御協力をいただきましたことに対し衷心より感謝申し上げます。

なお本稿作成に当りましては、小沢先生より稿を寄せられ且つ御指導御助言いただき、また、町文化財調査研究会長茂木雅太郎氏（町文化財保護委員長）同副会長大岡安雄氏（町文化財保護委員会副委員長）同副会長森田栄三郎氏、同会幹事田島一郎氏（町教育委員会学務係長）より終始御助言、御協力をいただきましたことに対し深甚なる感謝と敬意を表します。

昭和34年10月7日

妻沼町教育委員会社会教育係長
（妻沼町文化財調査研究会幹事）

石 川 一 由

妻沼経塚調査報告書

昭和三十四年十月五日印刷

昭和三十四年十月七日発行

編集人 石 川 一 由

発行所 埼玉県大里郡妻沼町
教育委員会（非売品）

埼玉県大里郡妻沼町大字妻沼一八四三

印刷所 聖進社印刷所

編 集 後 記

妻沼町大我井経塚 資料集第二号をお届けします。本号は会員の皆様が非常な関心を抱いている当町古代史の一頁に、スポットライトを経塚にあててみました。

出土品は再び妻沼に帰ってこない為に、資料集を復刻し、記念碑を建立いたしました。この資料を更に調査して、当町古代史の解明の一助にして頂ければ幸甚と思います。

経塚の碑建立に発願され、情熱を傾注された丹呉文化財審議委員長さんは発掘当時現場に居合せたことなどから、除幕式当日は感無量のものがあると思います。

本碑建立に当り、増田町長さんの揮毫を頂き、増田教育長さんに建碑位置を指定して頂き格好の場所を選んで頂きました。町当局のご厚意と又町内、町外の同好の皆様の協賛を頂きました事に厚くお礼申し上げます。

昭和 5 7 年 3 月

編 集 者 文 化 財 調 査 研 究 会 長 田 島 一 郎
教 育 委 員 会 庶 務 課 長 小 暮 千 吉
文 化 財 調 査 研 究 会 専 門 調 査 委 員 大 山 雄 三